第二期　第百二十一号　（初版）（無料）

# 音信不通　本のビオトープ

学びあう人々のために

2026.08.10　定有堂書店　発行

反照的均衡　奈良 敏行
プラグマティズムの魅力と難しさ　岩田 直樹
「読書室」＋奈良敏行「読書のリゾーム」　三砂 慶明
ぐるぐるまわる日記　鳥居 貴彦
日々是雑言（ぞうごん）19　萩原 俊郎
レ・キャメル　板野 円香
バースデイ・ガールへの道のり　おぎはらきえ
方言　堀内 菜摘
Would You Believe In Me　髙木 善祥
本を作る側から（41）　村瀬 謙介
論語について（15）　小原 修治
小泉八雲集 – 元型としての恐怖　古賀 啓三
ババヘラ　ムラカミヒロミ
内坪井町日記（26）　齊藤 仁昭
イギリスという幻想　三浦 永理
アイスコーヒー　あきの素生

## 反照的均衡

奈良 敏行
（定有堂 主人）

本屋は読書に追い越され、いまここを生きる。読書は一人の営みだが、やはり共有されたいと考える。見ているのは自分の未来であって背後ではない。この共有のあり方を本屋的人間という。言葉を拾う読書だ。

いつも同じことを考えている。拾った言葉が窓を開くという期待だ。近頃、反照的均衡という言葉を知った。自分の中に立ち現れる矛盾した考えを、時間をおくことで整合させるという意味だ。

考えることにいつも同じ傾斜がある。それは両義性ということだ。若い頃はそれを引き裂かれたというふうに感受していた。でも年老いてふり返れば、選択の二重性という具合に風景化できる。

先日、ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を再読した。二十代半ばの頃、両義性的な思い悩みにとらわれ、現実に足を踏み出すことができなかった日々、一つ年長のYさんにこの本を教わった。慶応でその哲学を専攻した人だっ

た。考察の出口がなく、狂気のように試行の車輪を回し続ける、異彩の人だった。多くを学んだ。しかしこの本の深みに分け入ることは、わたしにはできなかった。

六十年が過ぎ、言葉だけ拾えばいいのだと思うようになって、読み通してみようと思い立った。拾い得た言葉はやはり、「語ることができないことについては、沈黙するしかない」という一節だった。語りうるものと、語り得ないものの両義性と受け取った。このたび拾えたのは次のような言葉だった。

《世界がどうであるかということが、神秘なのではない。世界があるということが、神秘なのだ。》

両義性を真っ直ぐに、突き抜けた言葉だ。

理想と現実の相剋を生きる人間の両義性が至近にある。でもそれは人間の常ともいえる。とくに本を読む人たちにとって。本の中に書かれている事は預言との出合いのようでもある。しかしこの地に実現されてはいない。現実と理想、それを「重力と恩寵」といった人がいる。なるほど重力が強かったから両義性を生きる、と納得した。一方に強い欲望があり、一方に絶対的な「善」がある。半身が遠くまで行くのに反して、残る半身が逆方向へ、遠くまで行く。シモーヌ・ヴェイユはそれを、

《南に向かって北の星を見る》

と言った。南には欲望に引きずられる現実の世界があり、北には変わらない真理の世界がある。この両義性の中にあって、人はどう生きればよかったのか。「恩寵」などやって来はしなかった。

最近、定有堂教室「読む会」の講師、岩田直樹先生に、朱喜哲『バラバラな世界で共に生きる』という本を教わった。わたしの「狼疾」である両義性に光を当てる本だった。ローティの哲学の紹介だ。哲学は希望を語らなければならないというローティの主張だった。リベラリズムは「正義」を語ることではない、「悲惨」を取り除くことだという。ローティ『リベラル・ユートピアという希望』、渡辺幹雄『ポストモダンの魔術師』を続けて読んだ。岩田先生は、根底にはプラグマティズムの思想があるから、『プラグマティズム入門』伊藤邦武・ちくま新書を読んだらいいよと示唆してくれた。たしかに大陸哲学（形而上学）を相対化する力強さがそこにはあった。

恩寵は重力に由来する。しかし重力の中にあって必ずしも恩寵が訪れるわけではない。

鳥取で暮らすようになって、一つの恩寵が訪れた。それは『死の中の笑み』の著者の徳永進医師との出合いだった。わたしと真逆の人だった。この人のようにすれば、わたしも生きていけるかも知れないと思った。「日常（キュアで

なくケア）」に寄り添い続ける人だった。親しくなってしばらくした頃、「支えになっているのはどんな本ですか?」と尋ねた。「内緒だよ」と言って、鶴見俊輔『日常的思想の可能性』（一九六七年）という本を教えてくれた。そこにあったのはプラグマティズムの哲学だった。

両義性を解決してくれるものが、そこに感じられた。でもなかなか「真理」を手放せなかった。二十代の終わり頃には、菅孝行『鶴見俊輔論』を読んでいた。「真理」を手放すことを拒んでいたからだ。

六十年ほどしてプラグマティズムとの出合い直しがあった。『鶴見俊輔論』は、定有堂の古書コーナーにとうに放出していた。しかし、思うところがあって、先日古書で探して取り寄せた。

両義性に一様の解決はない。「南に向かって北の星を見る」、この「場所」に居続ける他に生きるすべを見つけられない。それでも「反照的均衡」とは「希望」の言葉なのだ。

ランボオの「また見つかった、／――何が、―永遠が、／海と溶け合う太陽」という恩寵の言葉。鳥取は水平線への日没が見られる土地だった。この土地はわたしにとって恩寵の土地だったかも知れない。

2026.07.17


ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』光文社古典新訳文庫 2014
シモーヌ・ヴェイユ「重力と恩寵」ちくま学芸文庫 1995
朱喜哲『バラバラな世界で共に生きる』NHK 新書 2026
ローティ『リベラル・ユートピアという希望』岩波書店 2002
渡辺幹雄『リチャード・ローティ　ポストモダンの魔術師』春秋社 1999
伊藤邦武『プラグマティズム入門』伊藤邦雄ちくま新書 2016
徳永進『死の中の笑み』ゆみる出版 1982
鶴見俊輔『日常的思想の可能性』筑摩書房 1967
菅孝行『鶴見俊輔論』第三文明社 1980
ランボオ・小林秀雄訳『地獄の季節』岩波文庫 1938



鳥取市　長尾鼻
@chatgpt

# プラグマティズムの魅力と難しさ

岩田 直樹
（再解釈本舗・「読む会」講師）

「読む会」界隈では、『何でもあり』がまかり通る現代に必要な思想はプラグマティズムだ！」が共通理解になりつつある。とはいっても、現時点での積極的賛同者は奈良さんと私の二人だけである。

きっかけは、前回取り上げた本、朱喜哲『バラバラな世界で共に生きる―リチャード・ローティーの哲学』（NHK出版新書、二〇二六年五月刊）を六月上旬に読んだことだ。すばらしい本で、すぐに奈良さんに紹介した。

私には乱読癖はない。「なぜこの本を読むのか」ははっきりしている。しかし、『バラバラ』を読んだ理由は全然思い出せない。新聞に紹介記事が出たのは読了後だ。この本の前後にはラカン本を数冊読んでいる。ラカンとローティーは思想的に結びつかない。

末尾の「謝辞」によると、本書は二〇二四年放映のNHK・Eテレ「一〇〇分 de 名著」のテキスト『ローティー「偶然性・アイロニー・連帯」』を大幅に加筆訂正したものである。「一〇〇分」は好きな番組の一つだが、ローティーを扱っていたことには気づかなかった。

『バラバラ』をもっと深めようと思って、谷川嘉浩・朱喜哲・杉谷和哉の鼎談『増補　ネガティヴ・ケイパビリティで生きる―答えを急がずに立ち止まる力』（原著二〇二三年、ちくま文庫、二〇二六年六月刊）を読む。前著と同様、奈良さんに「いい本ですよ」と伝える。

朱が解釈したローティーの思想は「哲学とは〈人類の会話〉を途絶えることのないように守るための学問である」というもの。『バラバラ』の帯は、「わかりあえない他者を敵にしないために。〈正しさ〉で殴りあう世の中で、「会話」の可能性（ポテンシャル）を問い直す」。

世の中にはさまざまな相容れない「正義」が存在する。トランプの「正義」、プーチンの「正義」等々、私たちには到底理解できない「正義」が世界を蹂躙している。「正義とは何か」をめぐる「会話」は成り立たない。

「正義」ではなく「残酷さ」「不正義」から議論を始めること。人間が経験する悲惨さに対する「感情教育」こそが「残酷さの回避」を目指す人々の「連帯」を促すのではないか。数多くの論点を丁寧に腑分けしていく『バラバラ』の肝を、私はこのように読み解いた。

そんなことを考えているとき、ふと素朴な疑問が湧い

てくる。ローティーはプラグマティズムの系譜に連なるが、そもそもプラグマティズムとは何なのか。

困ったときは『岩波　哲学・思想事典』(一九九八年)に助けを借りるのが一番だ。二段組・横書きでほぼ一頁にわたって解説される「プラグマティズム」を要約するのは難しい。「思想の特徴」(小見出し)を引用する。

「プラグマティズムの射程は認識論を中核として、形而上学・道徳論・社会理論にまで及ぶ。その中心となる思想は、人間の精神活動に関して、それまでの理論のように、アトミスティックな観念の内観的な直観をモデルにして考える視点を退け、むしろ現実の生における具体的な行為の中で精神活動が果たす役割を見る視点に重心を置いて、それら科学論・道徳論・存在論を改編し直そうという思想である。この思想は広い意味での〈生の哲学〉の流れに属するものであるが、その中でも特に、人間の認識作用を環境に対する適応や変革という過程の中に埋め込んで考える点で、一九世紀の進化論に強い影響を受けたものであるとともに、新世界アメリカの風土に合致した実験的精神を色濃く反映したものであると考えられる。」(一三九五頁、伊藤邦武執筆部分)

文中にある〈生の哲学〉とは、ディルタイ、ニーチェ、ジンメル、ベルクソンらの哲学を指す。フッサールの現象学、ハイデガーの解釈学、ヤスパースやサルトルの実存主義などに強い影響を与えた(九二六頁、丸山高司執筆部分)。

私は、「実用主義」「道具主義」と訳されることもあるプラグマティズムを、歴史と伝統のないアメリカの薄っぺらな哲学・思想だと思い込んでいた。思い違いを正すために、伊藤邦武『プラグマティズム入門』(ちくま新書、二〇一六年)を再読。刊行当時に購入して目を通した記憶があるが、本棚に見つからずアマゾンで再購入。内容は全く覚えていなかった。

プラグマティズムの祖はチャールズ・パース、ウィリアム・ジェイムズ、ジョン・デューイである。パースは記号論、ジェイムズは根源的経験論(一種の現象学、西田幾多郎『善の研究』に言及あり)、デューイは教育哲学の各分野で優れた功績を残した。

そうか、この三人がプラグマティズム第一世代なのか。デューイ、ジェイムズは著作を読んだことがある。パースは間接的にしか知らない。

第二世代に属するローティーの哲学を理解するには、まずは第一世代の哲学を勉強しなければならない。険しい道のりになりそうだ。

# 「読書室」＋奈良敏行「読書のリゾーム」

三砂 慶明
（読書室）

再録・【鳥取大学公開講座】定有堂書店 ・ 奈良敏行「読書のリゾーム」に参加してきました！ @ 2026/06/03 — 読書室ブログ

2026年6月3日、鳥取大学地域学部の公開講座「地域学部入門」に、定有堂書店の奈良敏行さんが登壇しました（大拍手）。（写真は、「音信不通」編集長のドラメリアさんに撮っていただきました！感謝！）

講義のタイトルは「読書のリゾーム」（奈良さんらしい）。

公開講座は、鳥取大学の地域学部の1回生を対象にした授業でした。

定有堂書店の存在を知らない学生に、奈良さんが定有堂書店の43年間を届けた濃密な一時間でした。

そもそも定有堂書店の存在を知らない学生たちに、定有堂書店のことが伝わるのだろうかと、ハラハラしながら講義を拝聴していたのですが、そんな心配は杞憂で絶好調でした（奈良さんすごい）。

いままでのイベントで大活躍していた奈良さん手作りのフリップは、「読む会」の岩田直樹先生、「音信不通」編集長のドラメリアさんのご尽力で、パワーポイントに大進化！！（スライドの操作は、安定のドラメリア編集長！いままでのイベントに参加してくれた皆様にもぜひお見せしたかった。）

今回の講義で奈良さんが、学生のみなさんにもっとも伝えようとしていたのが、「小さな一冊の衝撃」です。

一冊の本に出会うこと

で、それまで自分の中にしかなかった「無形の概念」が、本との出会いを通して「現実」に着地する。その驚きと感動を奈良さんの出会ってきた本、そして人、本屋での経験を通して縦横無尽に語ってくれました(素晴らしかった)。

(奈良さんが本棚に貼りつづけていたメッセージです。写真は、堀内菜摘さんにお借りしたものです。2023年10月24日撮影)

講義は、定有堂書店の店内のスライドショーからはじまり、ヘミングウェイの『移動祝祭日』、『BRUTUS』709号の「本屋好き。」、五木寛之の『デラシネの旗』、奈良さんの関わった同人誌『寺子屋雑誌』、『定有』、奈良さんを震撼させたリゾームとの出会い(『エピステーメー増刊号』(1977年))、『シェイクスピア&カンパニー書店の優しき日々』のジェレミー・マーサーの言葉と定有堂書店の対比、

私のお送りした絵葉書から拾ってくださった人生の分岐点の「石敢當」、ポール・ニザンの『アデン・アラビア』に、ランボーの『地獄の季節』と怒涛の本屋トーク。

最後は奈良さんの心の書、五木寛之の『青年は荒野をめざす』に回帰。

奈良さんらしく「青年の荒野」に、ドゥルースの「ノマドはどこにも行かない」を重ねて、定有堂教室に着地。

定有堂書店の新しい棚が、目の前で生成変化していく大興奮の一時間でした!!(本当に楽しかった。)

もちろん、地域学の授業なので、本の話だけでなく、町づくりについても、「ブリコラージュ」と「エンジニアリング」という概念を使い、ドゥルーズの「リゾーム」と「ツリー」の概念を対比させながら、本屋から見た新しい視点でお話してくれました。

途中、担当編集者の私ですら、ついていけず、え、どういう意味と「?」になる場面もありましたが、学生の皆さんがわからない単語や概念について、しっかり質問してくれて

（グッジョブ）、私自身、学びの深い１日になりました。

本屋が終わったあとも、奈良さんが語ってくれた言葉「青年は荒野を目指す」が心に残りました。

大阪に戻るバスの中で、私が目指す「荒野」は何だろう、私の人生にとっての「移動祝祭日」は何だろう、と新たな気づきと発見をいただきました。

講演の最後に、ステージで、定有堂書店の兄弟子の皆様と一緒に記念写真。

定有堂書店のＨＰのイベント情報を欠かさずチェックしてくれている皆様！！

わざわざ読書室のブログまで、見てくださっている皆様！！

（折角、見にきてくださっているのに、全然更新できておらず、本当にすみませんでした。大反省。猛省しています。）

講座の最後に、しっかりと『町の本屋という物語』と『本屋のパンセ』を紹介してくださった奈良さん！！（こういうさりげない紹介に本屋魂を感じるのは私だけでしょうか。大感動）

奈良さんの講義を記念して、数量限定で、送料無料のサイン本セットと、サイン本を作っていただきました！！
サイン本にはランダムで、奈良さんの魂のメッセージが書かれています。
どんな言葉に出会えるかはお楽しみに！！
読書室でした！！




本の購入は「読書室」のサイトで。
左のQRコードから訪問してください。

（ご案内）「読書室」にて販売　送料無料
【著者サイン本＋限定小冊子＋特典付】

奈良敏行＋三砂慶明
『町の本屋という物語』
作品社　2024　¥2,860



奈良敏行＋三砂慶明
『本屋のパンセ』
作品社　2025　¥2,860

# ぐるぐるまわる日記

鳥居　貴彦（開風社　待賢ブックセンター）

七月、京都の町には山鉾が並ぶ。にぎやかな行列が町をまわり、神輿が行ったり来たりする。ひとびとはその隙間できゅうくつそうにちまきをもらったりビールを飲んだりしている。息子は今年も子供神輿に誘ってもらった。炎天下、ふたつかみっつ学年が上の子たちに混ざってダラダラと神輿をひく。最初のうちは知らない子たちに囲まれて小さな声しか出していなかったが、神社に着く頃には暑さにやられて小さな声しか出なくなった。途中、氷水を頭にかけてもらっているときがいちばん元気だ。

「古本を引き取ってほしい」と高知から依頼がきた。呼ばれても行けないときもあるが、行けるときに呼んでもらえるなら行ったほうがいい。レンタカーを借りて早朝に京都を出る。淡路島を渡り徳島から山に入る手前のサービスエリアで休憩する。急に降ってきた前が見えなくなるほどの雨は高知に着く頃にパタリとやんだ。なくなった古本屋の親父さんが残した大量の本。家族に内緒で手に入れていたという山の上の倉庫、小さな遺影がふたつおかれた部屋、そして庭の向こうにあるもうひとつの倉庫。そのすべてに途方もない量の本がある。なにをどこまでやることが正解なのか、残されたひとたちの気持ちと、旅立ってしまったひとたちの思いを想像しながらひたすら手を動かす。モリオカさんはこの本をどうするつもりだったのだろうか。モリオカさんだったらこんな時どうするだろうか。

二日目の朝、山の倉庫に向かって車を走らせているとまた激しく雨が降ってきた。車通りの多い幹線道路を通学途中の子どもたちが傘をさして歩いている。ひとりが傘を横に向けて、盾のようにしている。遊んでたら濡れるでと思っていたら、車道と歩道の間に大きな水溜まりがあったのだった。しぶきが上がらないようにぐっとブレーキをふむ。なくなった古本屋の親父さんは子どもたちのことをいつも気にかけているひとだった。本屋を始める前は学校の先生をしていたという。絵本や児童文学や戦争にまつわる本が目につく。詩、文学、読書論、エッセイ、それから高知の郷土資料。選んでいるようで何も選んでいない。荷台を段ボールでいっぱいにしてドアを閉じる。帰り道、瀬戸大橋を渡り岡山を越えたあたりでまた激しい雨。とても倉庫に入り切る量ではない段ボールたちをどうするのか、運転しながらぼんやり考える。どこかからきた本はどこかに回せばいいのだ。自分の元に引き取ったような気もするし、いっときのあいだ預かっているだけのような気もする。古本は英語で Second

hand booksという。ふたつめの手にある本。ふたつめもあればみっつめもある。よっつでもいつつでも、いろんな手をぐるぐる回っていけばいい。

市役所の前の路上で、新しい雑誌を受け取る。店の前まで運送のトラックが来れないというのでドライバーさんと相談してそういうことになったのだ。もう五年くらい続けている。「今日はおみやげありますか」といわれて、おねがいしますと段ボールを渡す。中には返品する本が入っている。今月中に東京の倉庫についてくれるだろうか。今月の仕入れた本の数と、支払いの金額をなんとなく計算して返品をつくる。だが手渡してから一週間かかるときもあれば二日で入帳されているときもある。計算ができない。返品したものが返ってくることもある。逆送という。逆走ってなんの逆なのだろう。新刊書店で働いていたときは毎日毎日十個も二十個も段ボールを返品の雑誌でパンパンにしていた。入荷する雑誌はビニールに包まれて縛られただけの状態で届くのに、返品する雑誌は段ボールに入れる。段ボールが足りないときは売ってやるから買えと問屋は言う。段ボールに入れて送られた雑誌がふたたび売り場に並ぶことはほとんどない。いっとき売り場に並び、次の号が出ると返っていく。売り場には次の雑誌が並ぶ。雑誌売場だけではない。書籍売場も同じだ。新しい本が出て、古くなった本は返品される。売り場を本がぐるぐる回っている。常に移り変わる柔らかい本棚。入荷があるから返品が出る。返品ができるから注文ができる。

急に暑くなった七月の真ん中、近所の三階建のいちばん上の部屋からマンガを下ろすことになった。「三国志だけ残しておいて」といわれている。ベッドとテレビと本棚があるだけの部屋で、枕元の本棚の上から順番に空にしていく。本を抱えてぐるぐると狭い階段をまわるように降りる。なん往復したのかわからなくなったころ、玄関に積みあがった段ボールを見て依頼主がポツリと「息子はね、一年前に亡くなったのよ」と言った。三階に戻り、部屋の電気を消す。枕も布団もそのままになっているベッド。部屋の主がいなくなって、もうすぐ一年になるという。大きな本棚のはしっこに三国志だけが残っている。

開風社待賢ブックセンター　080-3166-1385
〒602-8125
京都市上京区大宮通椹木町上る菱屋町８１８
http://www.kaifusha-books.com

# 日々是雑言(ぞうごん)19

萩原　俊郎
（倉吉市在住）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

## 山田五郎さん逝く

山田五郎さんが亡くなった。以前このコラムで「お金は死ぬまでにきれいに使ってしまおう」という遺言や倉吉での講演のエピソードを紹介した経済評論家の森永卓郎さんと同じ、原発不明ガン。享年も森永さんと同じ67歳で、つまり私と同世代。身につまされる。

日本人男性の平均寿命は81・35歳と言われるが、生きてしぶとく発信して欲しい、と思う人ほど早く亡くなる。ということは、私はけっこう長生きするかも知れないのだが(笑)、いや、そんなことはだれも分からない。

鉄腕アトム、ビートルズ、万博、ヒッピー・ムーブメント。高度経済成長の空気をいっぱい吸い、どんどん豊かになっていく子供時代の幸福感を味わった。ひとつ前の、大学紛争からモーレツ社員に転じた「団塊世代」の熱い方々とは違い、ジェントリー(紳士的)だが、どこか妙に冷めた、「祭りのあと」を常に意識しているようなところがわれわれの世代にはある。

始まった祭りは必ず終わりが来る。文化やアートも、資本主義も。それを貫く永遠とは何か、人間が守るべき価値とは何か。山田さんと森永さんは、それをユーモアで包みながらメッセージを送り続けてきた。

私はといえば、「何をやってもいいし、何もやらなくていいのが老後だ」などとうそぶいているうちに、どんどん馬齢を重ねている(こういう時にふさわしい言葉だ)。ある時、奈良さんから「いつか、いつか、なんて言ってるうちに一生は終わってしまいますよ」と警告されたことがある。肝に銘じたい。

## 県美はどこに行く

ところで、山田五郎さんと鳥取県の関わりと言えば、3年前の春、県立美術館の開館2年前イベントに招かれたことだろう。私も米子の会場に足を運んだ。

もともと山田さんは、「A・ウオーホルのブリロの箱に3億

円もかけて…」という批判的な立場だったが、ご当地に招かれてはそうダイレクトにも言えない。

そこで、会場に「ブリロの箱の購入をきっかけに、美術史の授業はウオーホルやバスキアまで教えたい」と話す中学の美術教師がいれば、「素晴らしい。鳥取の人は思った以上にまじめで知的レベルが高い」と持ち上げ、「世界には1億、2億を何とも思わない富裕層がいて、アート作品は年々高騰している。宣伝と思えば3億円も安いかも」と〝変化球〟を次々繰り出し、「さすがメディア界を生き抜いてきた山田五郎さん」と感心したのだが。

のちに館長となる尾崎信一郎氏との対談では、ど真ん中の直球を投げた。「ブリロの箱なんて、ニュートン力学を知らない人に量子力学を教えるようなものですよ」。どんなに世界を変革した前衛アートも、美術史を知らない人や子供は理解できない、意味がない、と言い放ったのだ。

さらに「江戸期から近代（明治～戦前）、戦後の美術の流れを示す作品」という同館の収集方針にいたっては、「まるで全てではないか。一体なにを集めたいのか。金が潤沢な県ならそれでもいいが。これでは学芸員への白紙委任みたいなもの」と厳しく批判した。

こうした山田さんが遺した問いかけに、県立美術館はまだきちんと応えていないように思える。

ジョン・レノンの「イエス」

というのも、鳥取県はオノ・ヨーコや、やがてはバンクシーの作品も購入すると発表したからである。

ビートルズ・マニアなら常識だが、1966年、ジョン・レノンはロンドンで開かれたオノ・ヨーコの個展を訪れた。脚立を登り、虫眼鏡で天井に書かれた小さな文字を読むと『イエス』とあった。「あれが『ノー』だったら、僕はすぐ出て行っただろう」。アート・スクール出身のジョンはたちまち彼女に魅了される。

オノ・ヨーコはインタラクティブ（参加型）の前衛芸術家で、今秋に4620万円をかけて県が購入する「Fly Piece」も、白いキャンバスの額縁の前に白い脚立が配置されただけの作品だ。では、来館者は5千万円近い作品の脚立に登らせてくれるのか。警備上たぶん「ノー」だろう。ジョンならたちまち出て行くに違いない。。

かくして、「人寄せパンダ」のような脈略のない前衛アートのコレクションは増えていく。「ニュートン力学」のもとで暮らす県民の頭上には、巨額な購入費とは裏腹に、芸術に対する「？」がますます広がるばかりである。

# レ・キャメル

板野　円香
（薬剤師・岡山県在住）

《母は僕をシエロと呼んだ　美しい空という意味　でも鳥とはほど遠い　僕は自分をラクダだと思っている　私は運び、渡っていく――》*

舞台の幕が下りても、そのフレーズがしばらく頭の中で繰り返されていた。世界的俳優としてではなく、一つの魂としての物語。ジャン・レノによる一人舞台、『らくだ』。

「七月の連休、岡山にジャン・レノが来るらしいよ」

そう聞いたのは五月のこと。映画音痴な私にとって、ジャン・レノと言えば『レオン』の寡黙な殺し屋、あるいはドラえもんの人（トヨタのCM）といった程度の印象しかない。映画『レオン』も鮮明に浮かぶのはマチルダのことばかりで（ショートボブにMA-1が最高！）、レオンについては「なんか牛乳飲んでた人」くらいの記憶……なんともお粗末。こんな粗悪な人間が鑑賞していいものかと思ったが、「世界的俳優を生で見られる機会など二度と無いかもしれない」という下心に負け、チケットを購入した。

会場は岡山芸術創造劇場ハレノワの中劇場。一階の客席は約五百席ほどのすり鉢状で、舞台との距離が近いのが特徴。しばらくして、エキゾチックなピアノの旋律を背に、ジャン・レノが暗転の中から姿を現した。

物語は、七歳の少年がモロッコ・カサブランカの自宅のバルコニーで「通りを歩くあの人の未来は分かる？」と、母から問いかけを受ける場面から始まる。

両親はスペインのアンダルシア地方出身であるが、フランコ政権による混乱期を避けてモロッコへ亡命、ジャン・レノ自身はスペイン人の血を引くモロッカンとして育つ。喘息の転地療養で訪れた南仏モンペリエで、十二歳の少年はフランスの文化を浴び衝撃を受ける。次第に演劇に惹かれ、俳優の下積み時代、兵役、銀幕で誰かを演じることの苦労や自己の二重性、役者としての成功や喜び――そうした一つひとつの経験をにじませながら、一人の男の半生が描かれる。そこに在るのは、単なるサクセスストーリーではなく、自己というフィルターを通して人生を見つめ直すナラティブな回想録である。百分という長尺であったが、ノーカットで一人語り切る力量にも圧倒された。

タイトルでもある『らくだ』は、彼自身を象徴する存在として描かれる。スペインの血を引き、モロッコで生まれ、フランスで育ち、英国のミューズを伴侶とし、そして現在はアメ

リカを故郷とする。その遊動民のような人生だけではなく、「ラクダは私を守護する内なる動物。その背には家族や仕事など多くの荷を乗せながら、速度は遅くとも確実に、進むべき道をいく。時には重荷を下ろし、立ち止まることの大切さも忘れません」と語るように、彼の生き方を示すものでもある。

演出、構成、音楽、その全てが素晴らしかったが、特に印象的だったのは、映画と演劇の境界を行き来するような演出であった。舞台には、後方と舞台のちょうど真ん中辺りに、アニメーションを映す二枚の透過スクリーンがある。その間に役者が立つと回想の映像世界となり、前へ出ると「語り手」へと戻る。映像と舞台、客観と主体が、滑らかに交差しており、まるでシネマと演劇の中間に身を置いているような不思議な感覚を抱いた。

更に心動かされたのは、ジャン・レノが現在の身体性をもった「語り手」として物語を描いた点である。子どもを描くのに子どもを演じる必要はない。「あの頃、私はこう思った」と現在の身体を通して幼少期を振り返る。通常、私たちは過去を思い出すとき、当時の自分へ戻ることはで出来ない。『らくだ』は、その当たり前の事実を演劇の形式にも落とし込んでいた。また、人生を成功や失敗という出来事ではなく、その経験が自分にどのような意味を与えたのかという「内省の軌跡」として語っており、このナラティブな構成が、演劇に詳しくない私にとても響いた。

彼の自己形成は、どこから生まれたのだろう。複雑な出自を抱えながらも、友人たちは彼を自然に受け入れた。「彼らは自由の定義を教えてくれた」と語るジャン・レノ。その友人たちを表した「一味ではない、雑多なグループだ。誰もが秘密の裏庭を持っている」という一節が、とても印象的に残った。また、内気な性格とは裏腹に、お気に入りの香水と僅かなお金だけを持ち、思い立てば旅出ってしまう軽やかさにも惹かれた。その姿は、彼の小説『エマ』の主人公にも通じる。軽やかさと臆病さが不思議と同居しているところに、人間的な魅力が詰まっているのだろう。

モロッコという迷宮の街で生まれ、自らもまた舞台という迷宮に魅入られたジャン・レノ。一人の人間が自分自身と対話しながら人生を運び続ける物語に、小さな劇場は感嘆と鳴りやまぬ拍手に包まれた。

《ものを運び、横断してゆく　生きる意欲を商いながら　横断して、運んでゆく　思い出をお供にして》*

＊劇中歌「LE CHAMEAU」より一部抜粋

# バースデイ・ガールへの道のり

おぎはら きえ　（蔭山）

祝ってますか？

祝い事といえば、結婚、出産、試験の合格、会社設立などの周年記念、新年、成人や還暦などの節目などいろいろありますが、一番ポピュラーなのは誕生日ではないでしょうか。みなさんは誕生日、祝ってますか？

五月にフェルナンド・メインビッケ監督映画『ダック・シーズン』を観た。とあるマンション、十四歳の少年フラマは友人のモコとテレビゲームをしながら留守番をしている。そこに隣室の、彼らよりも年嵩な少女リタが「うちのは調子が悪いから」とオーブンを借りにやって来る。フラマは最初は断るが、食い下がるリタに根負けしてキッチンに案内し、自分達は宅配ピザを注文して再びゲームに興じる。ひとりキッチンで作業するリタ。焼き上がったケーキは焦げ焦げで大失敗。そこで彼女は自分の家に戻らずにフラマ宅のキッチンを漁り、レシピ本、材料を勝手に拝借して二度目のケーキを焼く。が、今度は味見をさせたモコが吐き捨てるレベルで不味い。より簡単なレシピで三度目に挑もうとするがフラマらから「もうやめろ」と言われるリタ。しかし彼女は譲らず、言い放つ。「私の十六歳の誕生日なの」「（家族は）誰も覚えてないけど」ここで自由奔放な彼女の荒んだ家庭と孤独が垣間見られる。

誕生日といえばケーキ。そのケーキを意地でも用意して自分を祝おうとするリタに私は心動かされた。

少なくともここ十年以上、「まぁ誕生日なんだし」という言い訳めいた理由でケーキ屋から買ってきたケーキを漫然と食べて済ませていた。誕生祝いというよりケーキを食べても許される日になっている。いい大人が自分の誕生日に自分で何かするなんて恥ずかしいような気もしていたが、『ダック・シーズン』を観て改心した。七月の私の誕生日は、リタに習って堂々と自分で自分を祝おう。

でも、どう祝おうか。私もケーキを作るか。しかし七月は気温が高くて生クリームには向かないし、そもそもケーキを焼いて食べる気になるか甚だ疑問だ。何かプレゼントを買うか。今、私は何が欲しい。よれよれになった ㅋ シャツを買い替えたい。ボロくなったヨガマットを新調したい。待て、これではただの買い物じゃないか。祝いだ、祝いなんだよ。

自分の祝い能力の低さには自覚がある。昔、出産した友人にお祝いを渡しに他の友人二人と彼女が入院している病

室を訪ねた。私はご祝儀袋に現金を包んでいったが、他の二人はそれぞれベビー服など赤ちゃん用品を用意していた。私は恥じた。たしかに現金は強い、融通が効く。赤ちゃんに必要なものがあればそれを使って購入してくれれば良いと考えて包んだのだが、あまりにも即物的だった。他の二人はそのお祝いの品を赤ちゃんのことを思って楽しく選んで購入したようだった。この選ぶ過程で想いを込めるということが金額の多寡を超えて美しいと思った。

で、私は私の誕生日に何をしよう。ただ古くなったモノを新調するのではなく、もっとこう…。まぁ、まだ時間はある。じっくり考えよう。

そう思っていたある日、十年乗った愛車が突如壊れた。高額な修理見積りにのけ反り、買い替えを決断した。決断したものの、「私の何がいけなかったんだろう…」「もっと乗っていたかったよ…」と未練を抱え呆然としながら車を選び、契約し、銀行に行ってマイカーローンを申し込み、それに付随して印鑑証明などの取得に市役所へ行き…、そんなことをしていたら、あっという間に誕生日を迎えた。

結局、特別なこともできず、「せめてこれくらいは」とお気に入りのケーキ屋でガトーショコラを買って帰り、コーヒーを淹れてひとりで食べた。

ケーキを食べながら村上春樹編訳『バースデイ・ストーリーズ』(中央公論新社)を開いた。村上春樹が、主にアメリカの作家による誕生日にまつわる短編小説を集め、翻訳もした一冊だ。誕生日といえど、ハッピーエンドといえるような作品は無く、孤独や断絶を感じさせるダークなものの方が多い。ウィリアム・トレヴァーの『ティモシーの誕生日』は特に重い読後感だった。そんな中、ラッセル・バンクスの『ムーア人』は、大人な、ちょっとほろ苦い後味だ。

本書の最後には、村上春樹の書き下ろし作品『バースデイ・ガール』が収録されている。二十歳の誕生日にイタリア料理店でアルバイトをしている女の子が主人公だ。彼女はある老人に「もし願いごとがあれば、ひとつだけかなえてあげよう」と言われる。

来年は、誕生日を祝えれる、余裕のある生活を送りたいです…と願いながら私は本を閉じた。

(著作)おぎはら きえ『迷妄蒙昧』陰山 2025

# 方言

堀内 菜摘
（秋田市在住）

「悪い子はいねがー」「泣く子はいねがー」

7月中旬、秋田県男鹿市にある「男鹿真山伝承館」にナマハゲが現れた。赤黒い顔に、つり上がった眉、大きな目と口…。恐ろしい形相でこちらをにらんでくる。泣くと山に連れて行かれるから、子どもたちは唇をかんで泣くのを我慢した。

しばらくすると主人が、出刃包丁を持って家中を動き回るナマハゲをなだめて、料理やお酒でもてなした。そして、お酒を酌み交わすナマハゲと主人の会話劇が始まったのだが…。男鹿の方言に慣れておらず、聞き取ることができない。内容が分かるのは4割程度だろうか。「これもまた文化だな～」なんてのんきに方言を楽しんだ。隣にいる友人は、何とか聞き取ろうと前のめりになっていた。そのまた隣には、ちんぷんかんぷんな表情をした台湾人観光客がいた。

ナマハゲが去った後、友人が「こりゃぁ、多言語対応が必要やわ。男鹿弁は難しいな～」とこてこての関西弁で突っ込むから、笑った。

私は奈良で育った。両親は生粋の大阪人で、子どもの頃から関西弁が身についている。関西弁でも、奈良県民は古風な奈良弁に、京都府民は雅な京都弁に誇りを持っている。また大阪には摂津弁、河合弁、泉州弁の大きく3つがあり、関西人は「堺の人ですか」などと方言から出身地を当てられる、という特技がある。

秋田でお酒を飲んでいたとき、秋田県民から「関西弁で話してみて～」とリクエストをもらい、関西弁に切り替えた。すると、ある若い女性が「むかつくー」と真顔で言った。「えっ？」と一瞬戸惑ったものの、その気持ちを理解できなくはなかった。

就職を機に奈良の実家を出て、鳥取で暮らし始めたころ、関西弁の使いづらさに直面した。関西弁は、方言だと分かりやすいから、「あ、外から来た人だ」と鳥取県民が身構える。一定の距離を取られたような気がした。そこで、「郷に入っては郷に従えだ！」と関西弁を抑えてみると…、一気

になじみやすくなった。徐々に鳥取弁にも慣れ、2年がたったときには、自然に鳥取弁を使うようになっていた。

鳥取から仙台に引っ越したときは、仙台市民の方言のなさに驚いた。進学や就職で、多くの人が移り住んでくるから、通じやすい標準語が使われるのだろう。また東北の人は、「なまっているね」と指摘されると、「気をつけなきゃ」と思う人が多いらしい。方言を修正する理由は他に、好きな人や尊敬する人のように自分もなりたいという欲求や、集団への仲間意識や忠誠心が関係しているそうだ。振り返ってみると、私は仲間意識からだった。

関西弁を修正して5年目、「関西弁で話して」と言われてから急きょ引っ張ってくる関西弁は、ちょっとエセっぽい、という自覚がある。関西人同士で話すナチュラルな関西弁と違って、取り繕ったような感覚。その違和感を、最近よくテレビで見かける。高市首相だ。政治家は、親しみやすさや、地元への愛着心を演出する話術がある。高市首相が使う奈良弁には、「社会から求められるコミュニケーションの形を体現してみせましょう」とすり寄ってくるような傲慢さを覚える。「むかつくー」と真顔で言いたいし、「ばかにすんな」とも伝えたい。ああ、ブーメラン。方言をアクセサリーのように着脱するのは、相手を不快にさせる可能性があり、注意が必要だ。

一方で、方言だからこそ伝わったり、距離が縮まったり、胸に迫ったりする経験も多い。方言でしか語れないこともある。沖縄の言葉、ウチナーグチには「悲しい」という言葉はなく、それに近い「ちむぐりさ(肝苦りさ)」という言葉がある。意味は「あなたが悲しいと、私も悲しい」。誰かの心の痛みを自分の悲しみとして一緒に胸を痛める、というウチナーンチュの心だ。

沖縄の言葉は、アイヌの言葉などと一緒に、国連教育科学文化機関(ユネスコ)が発表する消滅危機言語に認定されている。方言を守ることは、その土地の文化や、そこで暮らす人のアイデンティティーを大事にすること。沖縄の人が訴え続けてきた平和を私も大事にしたい。

高市首相にも、ウチナーンチュのような、想像力のある優しい心を持ってほしい。同郷の人に期待してしまうのは、人間のさがなのだろうか。そんなことを、男鹿のナマハゲに出会った翌日、比内地鶏の親子丼を食べながら考えた。

# Would You Believe In Me

髙木　善祥

（SHEEPSHEEP BOOKS）

六月五日、珍しく高校生の女の子が二人で来店。楽しそうにおしゃべりしながら店内を見て回っていたが、結局何も買わずに退店していった。何も買わなかった人にこそ話を聞きたいのだが、術がない。店を始めて三年経つが、中高生の来店が少ないのはずっと課題である。

仕事終わりに友人の店に顔を出す。お互いの店のことやイベントのやり方など、いろいろと話す。マンガを寄稿しているというＺＩＮＥをもらう。

＊

六月六日・七日は青谷音楽祭。二年前に行われた第一回に続いての出店。前回は悪天候で本を売るどころではなく、ブルーシートで商品を覆っている時間も長かった。

今回は、雨が降った時間もあったがまずまずの天気で、売上は想定していたよりもかなり多かった。単価の高い音楽系の書籍や、出演するアーティストが表紙を飾った九〇年代の雑誌などセレクトが上手くいったのが良かったのだろう。一〇代の頃から聴いていたアーティストがフラッと店に立ち寄って本を買ってくれたのが、この日のハイライトだった。

＊

六月二十三日、経理とファンドレイジングを担当している一般社団法人の総会。知人から誘っていただき関わるようになったが、さらに親しくなった人、ここで出会った人、別の場所で会ってここで出会い直した人、本屋としての自分とは重なりつつも別のレイヤーで一緒になることが増えた。いろんな立場で活発な議論ができるのも、よいことだと思う。

＊

六月二十四日、友人から委託販売の相談を受け、松江へ向かう。いま本を置かせてもらっているクリニックの院長と同じくこの友人も高校の同級生。ＳＮＳや新聞でこの取組みを見て興味を持ってくれて、二年前に出店した場所で本を販売してみたいとのこと。

「そもそもなぜ松江に出店したの？」という問いから始める。事業の話から、店を構える松江の中心地も鳥取同様シャッター街になっていて、周辺の店舗オーナーと一緒に何か始めたいと思っていることなど、色々な角度で話を聞いた。

本屋として何を・どこまでできるか考えながら本を選んでいる。

＊

六月二十六日、京都へ。NPO本の学校の企画で、誠光社・堀部さんとブックスキューブリック・大井さんの対談に、手伝いとして参加した。主題は「独立書店ネットワーク」についてで、立ち上げた意図や取引正味の改善ほか今後の方向性と、よく分からない部分がクリアになった。イベント終了後、堀部さんおすすめの町中華屋で飲み会。よりディープな話で盛り上がる。

翌二十七日は、店を始める前からお世話になっている開風社・待賢ブックセンターさんへ。店主Tさんとあれやこれやと長話をして、教えていただいた別の本屋に向かう。

会計時に「Tさんから教えてもらってきました。鳥取で本屋をやってます」とお話すると、ちょうど店のロゴが入ったTシャツを着ていたので「そのTシャツの？あ、定有堂書店のとこ？」と返ってくる。本屋の世界は割と狭い。

本屋や書店員について書かれた本は、著者の描くストーリーに乗り切れないことが多くほぼ読まなくなったが、実際に会って話を聞くのは楽しいし勉強になる。独立系書店の店主、町の本屋、外商部門もあるような書店の社長。場所も規模も違う方々が、それぞれの立場で実践してきたことと、自分が今やっていること／これからやろうとしているこ

との違いを考えている。

＊

【参考文献】

『本ってだいたいこうなってますよね？ ―― 図解で探る本のひみつ本のある場所を訪ねて』西岡 裕二 技術評論社

意外と知らないことが多い。

『本とは何か』難波 優輝 新潮社

「読書とは〈パフォーマンス〉である」という概念を手掛かりに、読書の意味を問い直す。本を読むって何でしょうね？

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 髙木善祥

# 本を作る側から（41）

村瀬 謙介
（小取舎）

鳥取大学地域学部で毎月行われている教授会。その後に講師を招いて例会が行われている。これまで講師には鳥取大学を退官された先生などが話されることが多かったらしいが、地域づくりを実践している方にも話を伺うべきだということで、私が講師として登壇することに。「地方から発信する知のインフラ―出版という実践」というタイトルで地域学部の先生の前でお話しさせてもらった。小取舎も設立して五年以上経ち、何冊も本を出してきたからこそ見えてきたことも多く充分に話ができた。こういう講演会は準備をする段階で己の活動を振り返り、整理されるのでなかなか良い。

その後、鳥取大学　令和八年度、全額共通科目「地域メディア論～地域発・共感を育てる情報発信～」で講師をした。この授業の目的はタイトルの通り、メディアのあり方を知り、地域課題を自分たちでも発信できるようにするというのが目的である。日本海ケーブルネットワークさんや日本海テレビさん、FM鳥取さん、小取舎という各メディアに二コマ与えられ、二週にわたり講師をすることになった。私の一週目は座学で、先の例会に使ったPDFを基に、小取舎のこれまでの活動や出版した本、地方出版社のあり方などの考え方を伝えた。次の週にはこの講義のシリーズも終わりに近いと言うこともあり、ちょっとゲームをしてみた。受講生一八人を六人一組にし、計三組でリレー小説をしてもらった。ルールは、一人ずつスケッチブックに三、四行くらい小説を書いてもらう。一人目は五分、二人目以降は三分の間に前の人の分だけを読んで小説を書く。最後の六人目の人はなんとなく終わらせる。前の人の文章を打ち消さない（例えば、「と言うのは嘘で」とか、「と言う夢を見た」など）。前の人の文章しか読めないので、「ですます調」が途中から「である調」になったりもする。設定の崩壊を招き、どこへ物語が着地するのかわからない。

最後の方で新たな登場人物が出てきたりするのもまた面白い。この三分と言うのが絶妙である。これが一〇分とかになると上手に書かないといけないというプレッシャーになる。全員が書き終わったら、それを私が発表した。そしてこのリレー小説を三本の短編の「原稿」とし、実際に印刷製本し、小冊子にした。それを授業の最終回に一八人全員に渡

した。本は丁寧に作る、けれどもジンのように表現を簡単にアウトプットできる側面も持っている。以下、その小冊子のあとがきより。

本来、出版物を制作するのには時間がかかります。企画会議などを含めるとテレビや映像コンテンツ、ラジオもそれなりの時間を有しますが、小説などの文を主体とする出版物は、コンセプトや章立てなどが決まってからも「書く」、「校正・修正する」作業時間があり、さらにそれを印刷して製本するのに一ヶ月ほど掛かります。SNSのスピード感とは全く逆。しかし、その間に精査する時間もあり、じっくり作ることができる媒体です。つまり「カッとなって本を出版した！」というのはなかなかない。小取舎の本も、未来に残したい郷土のこと、鳥取の人のことを核としているので、本当にじっくり、それこそ三ヶ月から半年ほど時間をかけて、間違いがないように作っています。

先日(七月一二日)、大阪市の寺が所有する「木造阿弥陀如来立像」の中から、源平合戦の時期の混乱などが書かれた平安時代末期(八四〇年前！)の古文書が大量に見つかったとニュースが報じていました。LINEやインスタなどのサービスがこの先五〇年も続くのでしょうか？

仏像というサーバーを使った昔の人は凄い。というわけで本は良いですよという話でした。皆様お疲れ様でした。

小取舎の最新刊

『猫風閣主人のひとりごと』
坂本修一　著
本体　一一〇〇円
発行　2026.6

# 論語について（15）

小原　修治
（県立高校教諭
湯梨浜町松崎在住）

子曰、君子懐徳、小人懐土、君子懐刑、小人懐恵。（里仁篇第四・第十一章）

子〔し〕曰〔い〕はく、君子は徳を懐〔おも〕ひ、小人は土を懐〔おも〕ふ、君子は刑を懐〔おも〕ひ、小人は恵を懐〔おも〕ふ。

『論語』には「君子」と「小人」とを対比する章が多く見られるが、本章の場合は、それを重ねたところに特徴がある。「君子懐徳」と「小人懐土」とを対比するのが前句、「君子懐刑」と「小人懐恵」とを対比するのが後句だが、両句をつなげる共通点はあるのだろうか。以下、両句を別々に論じながら、検討していく。なお、本章に頻出する「懐」の語については、朱子の新注が「懐は、思念なり」と説くのに従い、思いをはせるという意味に解しておく。

先ず、「君子懐徳」と「小人懐土」とを対比する前句について考えよう。「懐徳」の「徳」は道徳のことだから、「懐徳」は道徳に思いをはせる意味だろう。一方、「懐土」の「土」は土地のことだから、「懐土」とは土地に思いをはせる意味だが、どういうことだろうか。これについては、楊樹達『論語疏證』が本章の注において憲問篇第二章の「子曰、士而懐居、不足以為士矣（子〔し〕曰〔い〕はく、士にして居を懐〔おも〕ふは、以〔もつ〕て士と為〔な〕すに足らず）」を引き、そこに見える「懐居」の語が本章の「懐土」と同義だと説くのが参考になる。これによれば、本章の「懐土」は、いわゆる「安土重遷」（生まれ故郷や住み慣れた土地を離れたがらないこと）を意味し、孔子はこれにより働くことを勧め、安らぐことを戒めたとする。

ただ、楊氏の説では、なぜ「君子懐徳」と「小人懐土」とが対比されているのかが理解しにくい。思うに、君子が徳に思いをはせることは、公的な天下に思いをはせることを意味するのである。であれば、小人が私的な家居や郷土に思いをはせるのと対比的であることになる。君子が公的な天下に思いをはせることは、例えば、里仁篇第十章に「子〔し〕曰〔い〕はく、君子の天下に於〔お〕けるや、適も無く、莫〔ばく〕も無し、義に之〔これ〕与〔とも〕に比〔したが〕ふ」とあり、「君子」は天下に於いて敵（「適」）も無く、味方（「莫」＝「慕」）も無

く、「義」に従う、とされていることからも理解されるだろう。逆に、陽貨篇第十二章に「子〔し〕曰〔い〕はく、郷原は、徳の賊なり」とあり、「郷原」(田舎の善人)を「徳」を害する者だと批判するのは、天下に思いをはせない存在だからだろう。

続いて、「君子懐刑」と「小人懐恵」とを対比する後句について考えたい。「懐刑」の「刑」は刑罰のことだから、「懐刑」は刑罰に思いをはせる意味だろう。が、この意味で解釈すれば、一体「君子」のどのような点を誉めているのか分かりづらい。そこで、朱子の新注では「懐刑は、法を畏〔おそ〕るるを謂〔い〕ふ」とし、「刑」の語を「法」の語に置き換えて説明している。また、「懐恵」についても、「恵」は恩恵のことだから、「懐恵」は恩恵に思いをはせる意味だろうが、この意味で解釈すれば、「小人」のどのような点を批判しているのか分かりづらい。そこで、新注では「懐恵は、利を貪〔むさぼ〕るを謂〔い〕ふ」とし、「恵」の語を「利」の語に置き換えて説明している。

以上のように、本文の語を別の語に置き換えて説明することは恣意的に見えるかもしれない。が、本章に限っては、妥当と言える。なぜならば、前句の「懐徳」と「懐土」との組み合わせ、後句の「懐刑」と「懐恵」との組み合わせは、いずれも語の意味より音韻が優先された結果であり、意味の方は弾力的に捉えてよいと考えられるからである。なお、音韻が優先されている点については、吉川幸次郎の次の解説を挙げておきたい。「徳(トク de)と土(ト tu)、刑(ケイ xing)と恵(ケイ hui)とは、いずれも子音を同じくする二字、すなわちいわゆる双声の二字であって、一種の語呂をあわせた言葉である」(中国古典選『論語』上)。

『孟子』離婁下篇に春秋時代の名宰相である鄭の子産を孟子が批判した語として、「恵而不知為政(恵にして政を為〔な〕すを知らず)」の句が見える。朱子はこれに対し、「恵は、私恩小利を謂〔い〕ふ。政は、則〔すなは〕ち公平正大の体、綱紀法度の施有り」(『孟子集註』)と注釈を加えている。「恵」が個人を利する小規模で私的な恩恵であるのに対し、「政」は綱紀を正す大規模で公的な施政であるという意味だろう。思うに、本章の「恵」の語は、この「恵」の意味であり、本章の「刑」の語も、この「政」の意味に近い。それでこそ「君子懐恵」と「小人懐刑」とは対比的と言えるのだし、本章の前句と後句とは「君子」は公的、「小人」は私的という共通点でつながるのである。

# 小泉八雲集 － 元型としての恐怖

古賀　啓三
（米国ミシガン州在住）

この本は、次の読書会の課題本で、通常、文庫本を解説から読むことはしないが、今回そうした理由は、小泉八雲の作品を読んだことすらないくせに、英米人としては小男で、ほぼ侏儒、容貌も極めて怪異、そのコンプレックスが向かわせたのであろう日本で、怪談や俗信を収集した奇人、と先入観だけが肥大していたから。加えて、この本以外の他の著作を読み進めてゆくことはまずないとも思っていて、つまり、著者に関する歪曲した情報が修正されればいい。

（一）以下、『小泉八雲集』、解説からの抜粋。

「我々の生命は、過去幾千万億の生命の集合物である。過去の生命は、滅びることなく、脈々として我々のうちに生き、その経験は意識の深い奥底に遺伝されてきた。『草ひばり』が、たんに過去の無意識の経験に従ってうたっているように、我々も、その無意識の記憶によって現在生きているのである。しかし、覚めている間は意識に現れない、過去の無数の生命に潜在した記憶が現れてくるのは、夢の中であった。だから、夢に現れる恐怖は、人間の出現よりもはるか以前に、ものを恐れる能力をもった生物がうけた、苦痛や恐怖の記憶である。したがって、怪奇や超自然のかもしだす恐怖のうちに、我々は未生以前の人間存在、未開のはるかな過去にまでさかのぼる、霊的な経験をさぐることができる」

人間って、過去の無意識の記憶によって生かされてるんですよね。でも無意識の記憶って、起きてるあいだは思い出せず、思い出せるのは夢の中だけ、それも根源的な怖い夢、恐怖を通してのみ、過去の生命の無意識の記憶に通じることができるのです、ということか

「過去幾千万億の生命の集合物」「意識の深い奥底に遺伝されてきた経験」、すなわち「集合的無意識」にユングは、「母」「老賢人」「アニマ」などといった元型を見出したが、小泉八雲にとって「未生以前の人間存在、未開のはるかな過去にまでさかのぼる、霊的な経験をさぐる Probe」となるものは「恐怖」一択。祖霊信仰、輪廻回生などと、集合的無意識と、そこに潜む元型（八雲版では「恐怖」）の発露するイメージを採集するフィールドワークの場として日本は、特に西洋に非帰属感を感じていたらしい八雲にとって最適の場所であったのであろう、そのショーケースとして、耳なし芳一、牡丹灯籠、などといった怪異譚を披露したショーケースがこの本なのだ。と思う。こういう幽霊ばなしと並んで、筆者の文化人類

学的 Ethnography（民俗誌）、というか、参与観察による知見を交えたエッセーも記載されている。例えば

（二）本編『知られぬ日本の面影』の章中、『門付け』から。瞽女の唄う唄が、唄自体はありふれた、男女の心中の唱なのに、なぜか「忘れられた場所と時の感覚が、もっと霊的な感情と混じって、静かに戻ってきた」。そして「私には到底わからないこの東洋の歌が、しかも、盲目の下層の女が唄ったこのありふれた唄が、異邦人である私の心に、これほどの感動を呼び起こすのは」「この唄い手の声の中に、一民族の経験の総体よりもさらに大きな何ものかに、人類の生命のように広い、また善悪の知識のように古い何ものかに、うったえることのできる力があったのであろう」と、こういう仕方で、八雲版集合的無意識論を固めてゆく。

（三）『霊の日本にて』の章、『焼津にて』では、「古いしきたりや古い神仏に忠実な」「焼津という古い漁師町」を盆に訪ねる。眠れぬ夜を、「巨大な潮が、咆哮し続ける音に耳を澄ませ」ながら、「やがて私は、子供のころ、海の声に耳を澄ませたときに抱いた、おぼろげな恐怖を思い出していた」「この感情は私より、数百万世紀も古いもので、父祖より伝えられた恐怖の総体であろう。が、やがて、海に対する恐怖は、海の声によって目覚めさせられた、夥しい畏怖の一つの要素をあらわすものにしかすぎないという確信に立ち至った」なぜなら、焼津のあの荒潮の音を聴いていると「人に知られている恐怖のほとんどあらゆる音が聞き分けられたからである」「魂の経験という、より広大な海に動いている、太古からの恐怖のあらゆる波がこたえざるをえないのである」「そんなわけで、海のどよめきを死者の言葉とする古い信仰には、確かに少なからぬ真理がある。実のところ、過去の死者の恐怖と苦痛は、海のどよめきが呼び起こす、あのおぼろげな深い畏怖のうちに、我々に語っているのである」八雲版集合的無意識における元型としての恐怖は、過去の死者の恐怖と苦痛である。しかし、「死者は、全く死ぬことはない。疲れた心臓と忙しい頭脳の真っ暗な部屋に、彼らは眠っているーそして、ごく稀に、彼らの過去を呼び戻す何者かの声のこだまによって、目覚めるのである（前述『門付け』より）」と、やや Wishful thinking 風に聴こえはしまいか？ 恐怖元型のショーケースとして紹介された、幽霊ばなしや因縁ばなしも、死と直結した恐怖である。八雲版集合的無意識論は、八雲自身の死の恐怖を起点とした Wishful thinking である、と文庫本一冊を読んで決めつけていいわけがない。

# ババヘラ

ムラカミヒロミ
（フライングブックマン）

ここ数年来、「ババヘラ」が気になって仕様がない。秋田県を舞台にした某漫画に、頻繁に登場するのである。しかし、現地に行かねば無理だろうと思っていた。

秋田には、一度だけ、三十年程前に行ったきりである。鹿角在住の友人の案内で秋田市内の古書店をハシゴし、夜は「きりたんぽ」と「いぶりがっこ」を食べ、翌日は藤田嗣治の巨大な祭り絵を見て、秋田新幹線で帰ったのであった。

この時は、まだ「ババヘラ」の「バ」の字も知らなかった。訪ねたのが晩秋の頃であったので、彼にしても「ババヘラ」なんぞ、思いも寄らなかったに違いないし、そもそも時期的にも無理だっただろう。

ちなみに、彼は、筋金入りのラヴクラフティアンで、日本で最初の『定本ラヴクラフト全集』の編集に参画し、完結を支えた功労者である（遡ること十年、荒俣宏が個人全訳で挑戦したが、二巻で途絶している）。プロヴィデンスにあるジョン・ヘイ図書館（ラヴクラフト・コレクションで有名）の日本人訪問者第一号で、あの菊地秀行（彼は二番目だった）を悔しがらせた仁でもある。

さて、その眷恋の「ババヘラ」が、選りにもよって、近所のスーパーマーケットに山のように積まれているのを見たから堪らない。「何でや！」と、思わず叫びそうになった。店長の気まぐれか、発注ミスか、東北物産フェアの気配もなかったし…。

とまれ、そこには二種類、赤いのと黄色いのとが鎮座していた。赤はイチゴ味、黄色はバナナ味。（他にも、メロン味とソーダ&レモン味があるらしい）お値段は、ハーゲンダッツのミニカップより高かった。

しかし、通販だと一個五百円前後になるので、ややお得か。二個買いました。

ちなみに商品名は「BARA MORI」。「ババヘラ」は、S冷菓が商標を登録してしまっており、K冷菓の本品は、サブタイトルか惹句のように「秋田名物K冷菓のババヘラアイス」と控えめに書き添えられている。

そろそろ、「ババヘラ」とは、何ものなのかを説明しなければなるまい（賢明なる読者諸兄はお気付きと思うが）。

「ババヘラ」とは、秋田県限定のアイスである。

以下、あんばいこうの『ババヘラの研究』（無明舎出版、２０１１）によって紹介する。

著者は、きりたんぽ、いぶりがっこ、稲庭うどんに並ぶ秋田のソウルフードと断言する。

秋田の夏の風物詩で、主として国道筋での露店売りがメインだが、運動会や学園祭、海水浴場やフリマなど、凡そ人の集まる所には出店するという。その販売スタイルが極めて独特で、この不思議なネーミングの淵源でもある。

販売員は年配のおばちゃんたち。平たく言えば「ババ」たちである。国道の要所要所に配置され、ビーチパラソルと農作業ファッションがトレードマーク。車が止まって、注文があると、コーンの上に、金属ヘラで、ブリキ缶の中の二色のアイスを薔薇の花のように巧みに盛り付ける（バラ盛り。他にチューリップ盛りもあるとか）。かなりの熟練を要するらしい。

戦後間もない時期に、K冷菓の創業者が販売を始め、売り子として農家の御婦人たちを雇用、それが定着したという。

当地のスーパーに入ったものもK冷菓製である。ただし、コーンタイプではなく、カップだが、蓋が透明で、薔薇の花弁のようなアイスを見せている。

お味は、あっさり、さっぱり、舌に変な甘さやフレーバーが残らない、思い切りのいい爽やかさである。イチゴ味、バナナ味とは言い条、果汁も果肉も使われておらず、色素と香料だけのものである。法令上は「氷菓」であって、乳脂肪分もほぼ無に等しい（乳固形分3％未満）。

しかし、それが却って、真夏のギラギラの下では、好ましいだろうと思う。

振り返れば、小学生の頃、麦稈真田のおっちゃんが鈴を鳴らしながら、自転車で売りに来た十円アイス（これも、ラクトアイスか氷菓だったと思うけれど）が、こんな感じだった。盛りも少なかったけれど、暑い中、屋外で食べるアイスは格別なものがあった。

# 内坪井町日記（26）

齊藤 仁昭（ケバブジョンソン・元長崎書店勤務）

六月末日

突然ですが会社が閉業することとなりました。明日からは閉業にまつわる片付け作業に入る予定。さてどうしていこう。

六月半ばくらいに、閉業のニュースがローカルな報道に割と大きく出てしまい、閉店を惜しんでくださるお客様が多く来店されかなり忙しかった。前回のバスの接触事故の件も、坪井に帰る体力と時間がなく八代に泊まったのであった。

商品をたくさん用意しても一時間で売り切れるほどの大行列であったが、いや毎日このうちちょっとずつでもいらしてくだされば閉店は避けられたんですよ、とは言えなかった。愛と疎遠。

七月某日

ひたすら片付け。まずはゴミに出せるものを戸棚だとか物置だとかから掻き出せるだけ掻き出す。いらないものが多すぎる！分別をどこまでやったらよいものかよくわからない。倉庫にはエアコンがないので半日作業したらもう午後はろくに動けず。冷たい水がおいしい。おいしい水。Agua de beber。

七月某日

気分転換をしないとどうにかなってしまい球磨川に吸い込まれるような気分だったので、土日に休みを取って家族と一緒に大分に行くことにした。夏休み前なので宿もまだ安く取れた。

まずは11時ごろに阿蘇あたりに着くべく出発。持参した凍らせた麦茶の頼もしさよ。無事に阿蘇に到着し、から揚げ定食を食べる。子どもはすでに車内ではしゃぎすぎて眠そうで、ご飯も残す。残ったご飯は僕が全部食べる。おいしいから揚げだった。

山に入っていき、まだまだ大分までは時間がかかる。途中に見つけた道の駅で休憩。道の駅あさじというところで、裏

手に川が流れており気持ちのいい場所だった。河童の石像から水がながれているところにアマガエルが居て、子どもが捕まえて愛でている。ちいさくてたいそうかわいかった。ラムネを飲んだり、物産を眺めたり、なんかもう満足してしまいここに泊まってしまいたいくらい。

もうひとドライブして、大分市内に無事到着。ホテルに荷物をおいて街中を散歩。ドーナツ屋でお茶したあと、文具店に寄ったのだが品ぞろえが上品な感じでとてもよかった。そのあとカモシカ書店へ向かう。新刊と古書を織り交ぜた書店で、たいそうよかった。刺激を受けた。ここで働かせてもらうか？　残念ながら子どもの忍耐がもたず騒ぎだしたので早めに撤収。良い書店だったな。またゆっくり訪れたい。

一度ホテルにもどりひとやすみしてから、また街中に向かって夕食。魚がとても旨い。熊本とは全然違う。子どももよく食べていたが、食べ終わったら「もう帰りたい」とかすぐ言うのでゆっくり飲めず。残念。当然2次会もなく、宿へ戻って風呂に入れたりして早く寝る。

翌朝は子どものリクエストで水族館うみたまごへ向かう。4時間くらいたっぷり遊んで帰路へ。帰りはとにかく眠かった。

七月某日

土用の間は引っ越しだとか土いじりを避けるべき、というのを初めて知った。体調を崩しやすいからそう言うのだろうか。

大がかりな片付けも引っ越しみたいなものだから、あんまり頑張らない方がいいのかな。暑すぎるし、無理しないようにぼちぼちやることとしよう。

七月某日

久しぶりに練習で東京へ。5月6月は忙しさのためだいぶんライブのお誘いを断っていたので8月あたりからは無事にライブができるよう調整していきたい。

新曲を練習したり、数年やってなかった2曲に取り組んだりしてフレッシュ。

# イギリスという幻想

三浦　永理
（三十一歳・女性）

七月末、私は留学からの帰国の途についた。といっても、論文の提出は八月末であり、お粗末な自分のライティング能力では、ギリギリまでかかりそうである。七月十五日が初稿提出だったのだが、それを出した直後は、指導教官からコメントが返ってくるまで、しばらくやることもない。それで、旅に出ようと思ったのが、アイルランドである。

六月にスコットランドに奨学金団体のツアーで行った。まさにイギリスの小説にでも出てくるような古い街並み、バグパイプ、タータンチェックのスカートなど、スコットランドならではでもあり、イギリスの個性にもなっているようなものが街中で目につく。一方で、そのツアーは比較的新しく建てられた議事堂見学から始まった。スコットランドには、スコットランドの議会があるのだ。

現在のイギリスは、イングランドだけでなく、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドから形成された連合王国である。ならば、四つの地域（フォー・ネイションズ）を回らなければ意味がないのではないかと思い始めた。一月に行ったウェールズ、六月に行ったスコットランドに続いて、最後に無理やりすることにした旅行がアイルランド旅行、いや、北アイルランド旅行だった。

日本人からすると馴染みのないアイルランドだが、英語史の研究者からすると、「植民地に英語を強制するスタイルを初めて生み出した土地」としても記憶されている。つまり、アイルランドという国は、その植民地支配から解放されたという歴史を持つ。しかし、その北部は、ベルファストという都市を中心として、イギリスに留まる選択をした。北アイルランドでは、アイルランド系カトリックとイギリス系プロテスタントの住民での対立が高まった。これをイギリスでは、Troubles（問題）と呼ぶのだが、ロンドンではその話をほとんど聞かなかった。

イギリス国内のベルファストに飛ぶより、ロンドンからアイルランドの首都・ダブリンに行くほうが安かったので、まずはダブリンへと向かった。到着日は、初稿提出の七月十五日。アルゼンチン対イングランドのサッカーW杯の準決勝だった。街中では、アルゼンチンユニフォームを着ている人を数人見かけた。

翌日、ダブリンのトリニティカレッジという大学のガイド

ツアーでは、学生ガイドが案内してくれた。開学された十六世紀当時のイギリスにおいて、オックスブリッジについで歴史のある大学であった。そのため、イギリス全体の本が収集された図書室がツアーのハイライトでもある。

学生ガイドは、十九世紀におきた有名なジャガイモ飢饉についても、本来ならば採れていたジャガイモ以外の作物が、スコットランドやイングランドに拠点を構える地主たちによって、他の場所に輸出されていたことから起きた「植民地主義の構造による人為的な出来事」だったと話す。本当は飢えない可能性のあった人々が飢えて死に、一部の人々は新天地へと向かった。アイルランド島の人口は、現在も飢饉前の人口程度に回復していない。

翌朝、北アイルランドのベルファストへと向かった。

日中参加したのは、アイルランドと近いカトリック系住民とイギリスと近いプロテスタント系住民が分かれて住んでいるというピース・ウォール(平和の壁)の見学ツアーだった。日中は開いているゲートも夜になると閉められる壁には、さまざまな壁画(Mural)があり、モチーフもカトリック系・プロテスタント系の側で異なる。ベルファストでは、この辺りをタクシーで回る Black Cab ツアーが有名だが、私はウォーキングツアーに参加した。

最初は、カトリック系住民のガイドから話を聞く。一九六九年八月の暴動から物語を始め、そこから如何に分断が深まったかが語られる。活動家でもあった背景のある彼女の家族の多くが、王立警察に収監されたことがあり、多くの罪なき人々が犠牲になった。後半はプロテスタント系住民から話を聞く。「今まで聞いた話のコインをひっくり返す」という彼の意気込みから始まったツアー後半は、プロテスタント側の被害が語られる。なにせ、この Troubles の間最も被害を生んだのは、IRA というカトリック系のテロ組織なのだから。彼は「Troubles の前、カトリックとプロテスタントの住民が一緒に暮らしていた平和な頃に戻りたい」という。しかし、前半のガイドからすれば、それは職業上・生活上カトリック系住民が差別されていた頃に戻ろうとする行為にも聞こえるだろう。

旅行を終えた機内で、ベルファストの小学校の哲学の授業を映した映画『ぼくたちの哲学教室』を観た。日本から観るだけだと、過酷な中での希望のある対話の実践に見える。今の私には、教室の外にある絶望が、暴力がより強く画面の外の日常として見える。そして、それをイングランドの人間がどれほど感じているか、イギリスに無邪気に憧れる日本人にどれだけ届いているかはわからない。ただ、そこには幻想に巻き込まれた地の現実があるのだ。

# アイスコーヒー

あきの素生
（くうねるめがね）

毎朝コーヒーを飲む。紙のフィルターにコーヒー粉を入れて、お湯を注ぐ。カフェインの効果に期待して、なのはもちろん、コーヒーを淹れるときの香りが、鼻腔をとおって心地よく頭と心に目覚めや安らぎを運んでくれる気がする。短時間にたくさんの量を飲むことはできないが、飲まない日は、ほとんどない。

梅雨に入る前、初夏の兆しをすっ飛ばして夏になってしまったような五月末頃だっただろうか、昼食をとったあとにアイスコーヒーが飲みたくなった。

水分補給用に、水筒にぬるま湯を入れて職場に持っていく。やかんで沸かした水道水を、水道水で割ったものだ。鳥取の水道水はおいしい。家だと蛇口をひねってコップにいれた水道水をがぶがぶ飲んでいる。でも、水筒に入れるときはなんとなく、常温の水だと寂しいし、お湯だと熱すぎるので、今の形に落ち着いている。このぬるま湯では物足りないときに、コーヒーなどを淹れて飲む。

職場でコーヒーを飲むときは、インスタントコーヒーなりドリップコーヒーなりを職場のポットのお湯を使って淹れる。アイスコーヒーを飲みたいと思ったら、この熱いコーヒーに氷をいれるなどして冷やす必要があるが、自分用の氷は常備していない。自然、外に買いに行くことになる。食べるのが早いわけでもなく、昼休憩の残り時間は限られているので遠出はできないが、ちょっとした気分転換も兼ねて、一番近くの自動販売機まで歩いていく。もぐらのような生活をしているので、日差しがまばゆく目に痛い。風は生ぬるく、さわやかとは言い難い。それでも、アイスコーヒーが飲みたい。その一心で自販機に向かい、ボトル型の缶コーヒーを買って帰った。自席で飲んだアイスコーヒーは冷たく、午後からの仕事も頑張ろうと思えた。ただ、一度に飲み切ることはできないので、残ったアイスコーヒーは、机の上でだんだん温んでいく。

一度飲みたいと思ったら、毎日のように飲みたくなって、自販機に通う日が続いた。

たまには、近くのカフェやコンビニでもアイスコーヒーを

調達した。氷が入っているので比較的冷たさが保たれ、何よりおいしい。価格やお店までの距離から、頻繁には行かないが、「ちょっと元気出そう」とか「仕事ひと区切りついた」とかのタイミングで、カンフル剤やごほうびとして買い求めた。

節約精神が頭をもたげ、今日は我慢するぞ、と心に決めた日も、お昼ごはんを食べ終わると無性にアイスコーヒーが飲みたくなり、結局自販機に向かった。

食後のアイスコーヒーを我慢することは自分にはできない、と見切りを付け、家から用意していくことにした。いつもの水筒とは別の水筒に、朝淹れたコーヒーの残りをたっぷりの氷と一緒に入れて、職場に持っていく。缶コーヒーと違って温むことがなく、ずっと冷たいコーヒーが飲めるし、早くこうすればよかった、と満悦した。

そのうち、自分が欲しているのは、コーヒーではなく冷たさではないかという疑念がわいてきた。コーヒーを淹れるときのあの香りも嗅げないわけで。試しに、コーヒーではなく水道水を氷と一緒に水筒に入れて職場に持参した。昼食後に飲むと、すっきりした。拍子抜けしたが、準備も楽だし、これでよいならこれで、と冷たい水を持ち歩くようになった。

梅雨が明けたとたんに、本格的な真夏の暑さがやってきた。外を見ると、白むほどの日の光の強さにおののく。でも、耐えるしかないもんなぁ、とため息をつきながらふと気づく。アイスコーヒー（というか、冷たい飲みもの）を欲していない。あんなに毎日飲みたかったのに、ぱたりと止んだ。なんなら、いつものぬるま湯がいつもよりおいしい。自分の暑熱順化が完了したのだと察した。アイスコーヒーが、それに並走し、助けてくれていたのだとも。

ありがとう、アイスコーヒー。来年もよろしく。

# ご案内

ドラメリア（座敷わらし）

◇

定有堂教室「読む会」（講師　岩田直樹氏）
定有堂教室「ドゥルーズを読む会」
定有堂教室「読書室ビオトープ」
　それぞれ会場は　とりぎん（県民）文化会館
　葉香太極拳クラブ
　会場　麒麟スクエア（市役所二階　水曜夜・土曜昼）

・定有堂教室と太極拳の詳細は
　下記の、QRコード参照
　（@ドラメリア）

『音信不通』紙版の置き場
・県立図書館2階ハンコーナー
・エスキース（倉吉）・森の生活者・邯鄲堂・
・cafe mellow（カフェ メロウ）
・SHEEPSHEEP BOOKS（定有堂ビル2階）
・定有堂ビル2階「音信不通」編集部

・編集後記…

瀬戸大橋を渡ってきました。車で通るのは一九八八年の完成当時に家族で出かけて以来。記憶が曖昧で橋そのものの印象はなかったのですが、こんなに長大な橋だったのですね！六つの橋が連なる眺めは壮観でした。いろいろ調べてみて、本州四国連絡橋に三つのルートがあることをやっと知りました。（恥）

香川では、ずっと気になっていた「本屋ルヌガンガ」さんへ伺いました。仕事帰りにこんな本屋さんに寄れたらいいなあ…

最後に、このたびの地震により被害に遭われた皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。

ドラメリア（編集長）

29日県民文化会館横の「すなば珈琲」で、南陀楼綾繁さんとランチ・ミーティング。『本のある場所を訪ねて』の著者。ドラメリアさんも参加。「ひとり本屋」「ひとり出版社」などを訪ねた旅の記録です。本屋の「初発衝動」と「オブセッション」が色とりどり。やがて『人生のレールを外れる衝動のみつけかた』という本の話題になりました。「初発衝動」と「オブセッション」が入り口の本です。出口に何が見えるのでしょうか。―定有堂教室「読書室ビオトープ」のIさんが金土日限定営業の本屋プロジェクトを構想中。いままでの仕事は継続。このありようをなんと呼べばいいか？　啓三さんは「表現行為」とヒントをくれました。「本屋」は「パフォーマンス・アート」という視点です。超越論的視座。　奈良敏行（発行人）